

# 内視鏡センター NEWS

## コラム1

『家康、江戸を建てる』という本が売れている。この本の最初のテーマは江戸の水害対策で、有名な利根川の東遷工事について書かれている。しかしこれを請け負ったのが伊奈氏で、忠次からの三代をかけて成功させ、その墓は鴻巣の勝願寺にあることは全く知らなかった。意外と身近な話であったのだ。治水工事の現場はこの辺りのようなので、江戸を守るために埼玉北部地域の方は苦勞させられたのではないかと勝手に想像したりしてしまった。一方、このあたりの治水工事として、荒川の西遷も行われており、それは、利根川の東遷と併せて、忍領の水害対策という側面もあったらしい。当時忍領は家康の四男の松平忠吉が治めており、幕府にとっての重要拠点であったのだろう。今でこそ行田の街は熊谷に比べてマイナー扱いであるが、鉄道が通るまでは、この地域の中心は行田であったのだ。

その影響なのか今でも行田は道の繋がりがよく、どこからでも車で行くなら行きやすいとタクシーの運転手さんに聞いたことがある。そう考えると、電車では来にくいのが、自家用車や救急車なら来院しやすい当院は、病院としてこの地域で果たす役割も多いのでは、と感じてくる。

消化器内科は、今年メンバーがかなり入れ替わります。しかし、現体制になって5年経ち、多くの消化器の患者さまに来ていただけるようになってきました。これからも地域に貢献できるよう努力していきます。

## コラム2

2018年のシカゴマラソンで、日本の大迫傑選手が日本最高記録で優勝しました。報奨金が1億円であったことが大変話題になりましたが、私は彼の走法が大変気になりました。それはフォアフット走法といって足の前部分で着地をするといったものでした。これまでは踵で着地する走法が日本では常識とされていたようなので、日本人ランナーとしてはかなり斬新な走法であったようなのです。

マラソンについて詳しいことはわかりませんが、一年ほど前に行田を席卷したドラマ『陸王』を思い出しました。故障の多かった陸上の長距離選手が足に負担のかからないミッドフット走法に変え、その走法をこはぜ屋が作るシューズ『陸王』が支えるという話だったと記憶しています。フォアフットはミッドフットのさらに進化版なのでしょうか？ 走法の追求はここまでですが、私が感じたのは従来、常識と思われたことから離れ、一歩飛び出すことで物事が進化することがあるということです。

内視鏡で早期胃がんが切除されるようになって約10年、大腸がんは数年でしかありません。治療法として安定して行えるようになりましたが、まだまだ進歩していくはずだと私は考えております。これまでの常識にとらわれず、常に進化するように努力していけば、新しい世界が開けるのではないのでしょうか。

内視鏡治療は、早期がんを治し切る治療としても当然行いますが、外科手術が難しい方に対する姑息的治療としても貢献できるのではないかと、その適応についても広がる可能性があると考えています。